

ダニエル書 - 第百六十七

預言を解き明かす：ダニエル書11章10節とその先の歴史的・預言的意義

Jeff Pippenger

2024-03-30

ダニエル書第十一章第四十節は、終わりの時である1798年、北の王が南の王の手によって致命的な傷を受けるところから始まる。その歴史は、紀元前246年にプトレマイオスが北方の王国に報復を加えた年によって予表され、また1798年にナポレオン率いるフランスが教皇を捕囚とした出来事によっても予表された。第九節において南の王がエジプトへ帰還した後、第十節は、北の王が南の王に対して反撃を開始することを示している。

こうして、南の王は彼の王国に入り、自分の地へ帰る。しかし彼の子らは奮い立ち、大軍を集める。やがてそのうちの一人が必ずや来て、氾濫のように押し寄せ、通り過ぎる。のちに彼は引き返し、奮い立って、その要塞にまで及ぶ。ダニエル書 11:9, 10

第十節を成就した歴史についてのユライア・スミスの注解を検討する前に、「あふれ、通り抜ける」という表現に留意しておきたい。このように訳されているヘブライ語の語句は、第40節では「あふれ、越える」とも訳されている。原語のヘブライ語では同一の語句である。聖書の中でこの語句が見られるのは、もう一か所だけである。

彼はユダを通り抜け、氾濫して押し寄せ、越えていき、首にまで達する。伸ばしたその翼は、インマヌエルよ、あなたの地の広がりを満たす。イザヤ書 8:8

ダニエル書十一章十節と四十節、さらにイザヤ書八章八節では、同一のヘブライ語の句が、同じ意味を表しながらも三通りに訳されている。句の最後の語であるヘブライ語「abar」は、十節では「pass through」、四十節では「pass over」、そしてイザヤでは「go over」と表されている。三つの箇所における意味は本質的に同じだが、イザヤ書ではこれらの箇所の間にもう一つの預言的なつながりもある。

イザヤ書のその一節は、アッシリアの王がユダを征服してエルサレムにまで来たが、都そのものは決して征服しなかったときに成就した。彼は「首まで」来たが、「頭」を征服することはなかった。同じ預言の中で、イザヤは「頭」が何を表すかという預言的象徴を示し、「頭」を王国の首都とし、またその王国の王も「頭」であると示している。彼は、「頭」とは王であり王国であるという預言的真理を二重に証し、さらに、もし預言を学ぶ者がこの真理を受け入れて理解しないなら、堅く立てられないと、謎めいた言い回しで伝えている。その謎めいた一節は、北の王が押し流して越えて行くが、「首まで」とどまると述べる、まさに同じ預言の一部である。

アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツィン。六十五年のうちにエフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリヤ、サマリヤの頭はレマリヤの子。もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書 7:8, 9

シリアという国の「頭」はその首都「ダマスカス」であり、「ダマスカス」（首都）の「頭」はシリアの王「レツィン」であった。また、エフライムという国の「頭」はその首都「サマリア」であり、「サマリア」（首都）の「頭」は「レマリヤの子」（ペカ）、サマリアの王であった。同じ預言で、次の章の八節に、アッシリアのセンナケリブ王がエルサレムを包囲したことが述べられており、八節で、そのエルサレム包囲は首にまで達するものとして示されている。

二人の証人の証言に基づいて「頭」という預言的象徴を示す7節と8節は、王とその国の首都の双方を表しており、イスラエルの北王国と南王国に対する二つの二千五百年の預言の起点を特定する六十五年の預言である。ゆえにこれは非常に複雑な節である。というのも、ダニエル書11章の10節と40節と結び付いており、いずれも北の王が南の王を攻撃する交戦をも特定しているからである。ちょうど、北の王であるセンナケリブが、イザヤ書8章8節で南の王であるユダを攻撃したのと同様に。

これらの北の王と南の王の交戦を結びつける鍵は、「頭」と「氾濫して通り過ぎる」である。十一章十節で北の王が南の王に反撃すると、彼は戦いに勝つが、「頭」は残す。なぜなら、彼は南の王の「要塞」へと「来て、氾濫し、通り過ぎる」からである。十節の歴史は北の王の南の王に対する勝利を示しているが、彼はエジプト（その「要塞」）、すなわち首都-「頭」-には入らない。

南の王が七節と八節で以前に北の王を打ち負かしたとき、彼は「北の王の要塞に入り、」「勝利を収め、」「捕虜を連れ去って」「エジプト」に戻った。北の王が報復の勝利を収めたときには、彼はエジプトには入らなかった。これは、1989年にソビエト連邦が一掃されたとき、ロシア、その首都-その頭-は立ったまま残されたことを表している。「もしあなたがたが信じなければ、必ず堅く立つことはできない。」十一節と十二節で南の王として表されているのはロシアであり、古代にはラフィア、今日ではウクライナである境界地帯の戦いに勝利するのはロシアである。

『第10節。しかし彼の子らは奮い立ち、大軍勢を集結させる。そのうちの一人が必ず来て、押し流し、通り抜ける。やがて彼は引き返し、なおも奮い立って、彼の要塞にまで及ぶ。』

この節の前半は複数形の「息子たち」を、後半は単数の「ひとり」を語っている。セレウコス・カリニコスの息子は、セレウコス・ケラウノスとアンティオコス・マグヌスであった。この二人は、父と祖国の大義を擁護し仇を討つという事業に熱心に取り組んだ。うち年長のセレウコスが先に即位した。彼は父の領土を回復するため大軍を召集したが、身体的にも財政的にも弱く臆病な君主で、資金に窮し、軍を統制することもできなかったため、2、3年という不名誉な治世ののち、将軍二人に毒殺された。そこで、より有能な弟アンティオコス・マグヌスが王に推戴され、軍の指揮を執ってセレウキアを奪還し、シリアを回復した。彼は講和によっていくつかの地を掌握し、他の地は武力で制圧した。続いて休戦となり、双方は和平交渉を行いつつも戦備を整えた。そののちアンティオコスは戻ってエジプトの将軍ニコラスを戦闘で打ち破り、エジプトそのものへの侵攻さえも考えるに至った。ここにこそ、『ひとり』がまさに『氾濫して押し通る』のである。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』253ページ。

1989年のソ連崩壊は「終わりの時」を画し、その節に出てくる二人の息子は、レーガンと初代ブッシュという二つの道標を表している。1798年に「終わりの時」が始まって以来—そこからダニエル書11章40節が始まったのだが—ローマの淫婦は忘れ去られてきた。というのも、彼女はイゼベルとしてサマリアにとどまり、夫アハブがカルメル山でエリヤに対峙している間、背後に控えていたからである。彼女は身を潜めてはいたが、第一次世界大戦や第二次世界大戦のときと同様に、密かに糸を引いていた。彼女の夫は、南の王に対する彼女の代理の軍勢である。彼女が1989年に報復したとき、彼女は北の王として、戦車、船、騎兵を率いて現れた。

終わりの時には、南の王が彼に攻めかかり、北の王は戦車と騎兵と多くの船を従えて、つむじ風のように彼に向かって来る。彼は諸国に侵入し、洪水のように押し流して通り過ぎる。ダニエル書 11章40節。

報復における彼女の代理は、「船」（すなわち経済力）と「戦車と騎兵」（すなわち軍事力）によって表されている。軍事力と経済力は、終末の預言におけるアメリカ合衆国の二つの預言的屬性である。というのも、アメリカ合衆国はイゼベルにひれ伏さない者たちに売買を禁じ、それでもなおイゼベルの権威のしるしを拒むなら彼らを処刑するからである。1989年にソビエト連邦の解体をもたらしたのは、教皇庁と協力して行使されたアメリカ合衆国の経済力と軍事力であったが、ロシアは存続した。

ダニエル書第11章10節を成就した歴史は、1989年に終わりの時を示す40節の後半に記された歴史の中で繰り返されている。6節から9節の歴史は、40節の前半で示されている終わりの時へと至らせた歴史を表している。ダニエル書第11章の5節から10節は、ダニエル書第11章40節の歴史を完全に例証している。というのも、ホワイト夫人が記したように、「ダニエル書11章でこれまで成就してきた歴史の多くは繰り返される」からである。

ダニエル書11章1～4節は、終末の「終わりの時」における二つの角を持つ国の第二の王、キュロスを指し示している。終末の「終わりの時」は1989年であり、キュロスに象徴される第二の大統領が、預言の研究者が1989年以降の第六代大統領まで数え上げることを可能にする預言的な連続を確立する。その第六代は最も裕福な大統領となり、世界のグローバルリストであれ米国のグローバルリストであれ、グローバルリストという竜の勢力をかき立て（目覚めさせ）る。続いてその預言的歴史は、聖書預言の第七の王国、すなわち国際連合の十人の王へと飛び、アレクサンドロス大王（「人々の戦士」を意味する）によって表されるその主要かつ最初の王を特定し、人類の猶予期間の終わりにイスラムの四つの風が完全に解き放たれるとき、その王国が最終的に解体されることを示す。

そして第五節から第九節は、538年に教皇権が王座に就くに至る以前の時期を表す歴史を示している。というのも、のちに北の王となる勢力は、かつてセレウコスがそうして北の王として確立されたように、まず三つの地理的障害を克服しなければならないからである。その後、実際の三十五年に相当する「三年半」のあいだ北の王が統治したが、南の王が彼の要塞に侵入して彼を捕虜とし、やがて彼はエジプトで落馬して死んだ。こうして、これらの節は1798年の終わりの時に終結した歴史を指し示している。

第十節は1989年の「終わりの時」の歴史を指し示しており、五節から九節と合わせて四十節の歴史を表している。これは三十節から三十六節の歴史についても同様である。した

がって、一節から十節までは、行に行を重ねるかたちで、二つの預言的な筋がある。第一の筋は第六王国と第七王国の指導者たちを扱っているが、第六王国の六番目にして最も裕福な大統領と第七王国とのあいだには空白がある。

二行目は、三つの障害が取り除かれた歴史、北の王が在位した期間とその後1798年に誰が退けられたのか、さらに1989年に至るまでのこと、そして前の行でキュロスによって表されている第二の大統領を取り上げている。

11節と12節は、第2節の裕福な大統領の後に展開する第三の歴史の流れを示しており、それは1989年の終わりの時に起きたソ連崩壊の後のいつかで、なおかつ第16節に示されているアメリカ合衆国のサンデー法よりも前のどこかの時点に位置づけられる。

1989年における終わりの時の後の歴史は、第一の行において、2016年に始まりグローバリストたちを奮い立たせる、第六の、しかも最も富める大統領へと導かれる。預言的歴史は、第二の行において、1989年へと導かれる。十一節と十二節におけるラフィアの戦い（「境界線」）は十三節に先行しており、そこでは、つい最近打ち破られた北の王が自らの軍隊を再建し、その後、十六節の日曜法の直前に南の王を打ち破る。十三節における北の王の代理勢力は、1989年から日曜法に至るまで統治する八人の大統領の最後の者である。したがって、十三節は、その七人のうちの一人である第八の大統領の選出の時、あるいはそれ以後に起こらなければならない。十一節と十二節は、第六の、最も富める大統領の直前に始まり、そしておそらく、その同じ大統領の選出の直前に終わるのであり、その大統領は、その七人のうちの第八の者となって、十三節から十五節における代理戦争の第三の戦いにおいて勝利を収めるのである。

十一節と十二節における南の王の報復は、十節において南の王が被った敗北に対する応答である。十節は、1989年における北の王の勝利を示しており、その勝利は、アメリカ合衆国とバチカンの秘密同盟によってもたらされた。北方の軍勢にとってのその勝利は、代理戦争の第一の戦いであった。古代において成就した文字どおりの熱い戦争は、終わりの日における代理戦争を予表していたのであり、それゆえ、十一節と十二節の勝利は、代理戦争の第二の戦いにおける、南の王の勝利となる。

十節から十五節には三つの戦いがあり、それらはすべて古代において文字どおりの熱戦によって成就したが、それらは終わりの日における代理戦争の中の三つの戦いを表している。第一の戦いは、一九八九年に、竜に対して、獣と偽預言者の秘密同盟によって勝ち取られた。代理戦争における第二の戦いは、教皇とその代理軍の同盟に対して、南の王の無神論的な竜の勢力によって勝ち取られるであろう。代理戦争における第三の戦いは、十三節から十五節に示されているとおり、北の王の代理軍によって勝ち取られるであろう。

預言的には、三つの熱戦としての世界大戦があり、三つの戦いから成る三つの代理戦争があり、さらにイスラムの三つの禍いの戦いがある。また、内戦と革命戦争もある。代理戦争の第二の戦いは今、ウクライナ——「境界線」——において進行中であり、それはラフィアによって表されている。ラフィアは、歴史上において第十一節と第十二節が最初に成就した時、南の王と北の王との境界線であった。

ウクライナにおける代理戦争の第二の戦いが遂行されているまさにその同時に、栄えある地に対するイスラムの三度の攻撃のうち第二の攻撃もまた生じている。第三の災いの第一の攻撃は二〇〇一年九月十一日に到来し、そのとき十四万四千人の印する働きが始まった。印する時は、まもなく合衆国に到来する日曜法の時に終わるのであり、そのとき第三の災いとしてのイスラムは再び合衆国を攻撃するであろう。最初の打撃と最後の打撃は同一であり、それらはいずれも黙示録十八章の天使の声を画するしるしであり、その声はまた第三天使の声でもあり、また第七のラッパの響きでもあり、また第三の災いでもある。

これら二つの攻撃のただ中に、すなわち二つの声のただ中に、すなわち第七のラッパの響きのただ中に、第三の災いのイスラムは、現代の霊的な栄えある地ではなく、古代の文字どおりの栄えある地を、2023年10月7日に攻撃した。

その時に始まった戦いは、今まさに、第十一節および第十二節に記されているラフィアの戦いが起こったのとまさに同じ地域で進行している。ガザ地区は、南のユダ王国とエジプトとの境界線である。2023年10月7日は、反逆を示す、あるいはヘブライ語アルファベットの第十三字を示す他の輪の内にある一つの輪であり、その文字は最初と最後の文字とともに「真理」という語を形作る。

第三の災いとしてのイスラムによる栄えある地への第二の攻撃は、2023年10月7日に起こり、それは、古代のラフィアの戦いが第十一節と第十二節の成就として生じた、まさにその地域において起こった。栄えある地に対する第二の攻撃は、預言的地理象徴を通して、ウクライナ戦争によって表象される代理戦争の第二の戦いと結び付けられている。

一行また一行と重ねられつつ、いまウクライナ（国境地帯）において進行中の代理戦争の第二の戦いには、第三の災いのラッパの第二の音（2023年10月7日）が含まれており、それは十四万四千人の封印の最終期間において成就するものである。その封印の経験は、ダニエルが第十章において、二十一日間の嘆きの期間の後に「マラー」の幻を見たときに例証されているが、その二十一日間とは、二人の預言者が大路に死んでいた三日半のことである。その幻は、「終わりの日に神の民に臨むこと」の説明として解き明かされた。

封印の真理であるヒデケル川の幻によって表されている真理は、11節から15節までの預言的な歴史の中で成就する。それは1989年に始まる40節の歴史であり、41節へ、そして間もなく来る日曜法へと続く。それは、2節の第六の最も裕福な大統領の歴史が、3節に記されている「アレクサンダー大王」の第七の王国に至るまで表されているということである。

2014年における代理戦争の第二の戦いの開始とともに始まり、続いて2015年に最も富める大統領がその選挙運動を開始したその歴史は、1989年から第四十節の第四十一節における日曜法に至るまでの空白の領域であり、またそれは、第二節における第六の、最も富める大統領から第七の王国に至るまでの空白の領域でもある。それは、2001年9月11日に黙示録第十八章の第一の声とともに始まり、黙示録第十一章における大地震の時の第二の声をもって終わる歴史である。その歴史はまた、エゼキエル書第十二章において、すべての幻が成就すると特定されている歴史の期間でもある。その期間は、十四万四千人の

印を受ける時である。神の民の聖化は、御言葉を通して成し遂げられる。

彼らをあなたの真理によって聖めてください。あなたのみことばは真理です。ヨハネ 17:17.

次回の記事でこの研究を続けます。

この幻は、エゼキエルの心が暗い予感で満ちていた時に彼に与えられた。彼は父祖の地が荒れ果てているのを見た。かつて人で満ちていた都には、もはや住む者がいなかった。その城壁の内からは、喜びの声も賛美の歌も、もはや聞こえなかった。預言者自身も異国の地で異邦人となり、そこでは果てしない野心と野蛮な残酷さが支配していた。人間の暴政と不正について彼が見聞きしたことは彼の魂を苦しめ、彼は昼も夜も激しく嘆き悲しんだ。しかし、ケバル川のほとりで彼の前に示された驚くべき象徴は、地上の支配者たちの力にまさる、すべてを治める権威を明らかにした。アッシリアとバビロンの高慢で残忍な君主たちの上に、憐れみとまことの神が御座に着いておられた。

預言者には、車輪のように入り組んで大いなる混乱に巻き込まれているかに見えた事柄も、実は無限の御手の導きのもとにあった。これらの車輪を動かし、指揮するものとして彼に示された神の霊は、混乱から調和を生み出した。こうして全世界は御手の支配のもとにあった。栄光に輝く無数の存在が、御命令ひとつで悪しき人々の力と策謀をくつがえし、御自分に忠実な者たちに益をもたらす態勢にあった。

同様に、神が愛するヨハネに将来の時代にわたる教会の歴史を開示しようとしておられたとき、七つの教会を象徴する燭台の間を歩まれる「人の子のような方」を彼に示すことによって、ご自分の民に対する救い主の関心と配慮の確証をお与えになった。ヨハネは、教会が地上の権力と最後の大いなる戦いをするさまを示される一方で、忠実な者たちの最終的な勝利と解放をも見ることを許された。彼は、教会が獣とその像とに致命的な闘いへと巻き込まれ、その獣の礼拝が死刑をもって強制されるのを見た。しかし彼は、戦いの煙と喧騒のかなたに目を向け、シオンの山で小羊と共にいる一群の人々を見た。彼らの額には獣の刻印の代わりに、「父の御名が記されて」いた。さらに彼は、「獣とその像とその刻印とその名の数に打ち勝ち、神の琴を手にしてガラスの海の上に立つ者たち」が、モーセと小羊の歌を歌っているのを見た。

これらの教訓は私たちの益となるものです。私たちは神に対する信仰を堅く保たなければなりません。というのも、私たちの目の前には人々の魂を試す時が迫っているからです。キリストはオリーブ山で、御自身の再臨に先立つ恐るべき裁きを語られました。「あなたがたは戦争と戦争のうわさを聞くであろう。」 「民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、至る所で飢饉と疫病と地震が起こるであろう。これらはすべて産みの苦しみの初めである。」これらの預言はエルサレムの滅亡の際に部分的に成就したが、終わりの時代に対してはより直接的に適用される。

私たちは重大で厳粛な出来事の入り口に立っている。預言は急速に成就しつつある。主は戸口に立っておられる。まもなく、すべての生ける者にとって極めて重大な時期が私たちの前に開かれようとしている。過去の論争は再燃し、新たな論争が起こるだろう。私たちの世界で繰り広げられる光景は、まだ夢にも見ていない。サタンは人間を手段として働いている。憲法を改変し、日曜遵守を強制する法律を制定させようと努め

ている人々は、その結果がどうなるかをほとんど理解していない。危機がまさに目前に迫っている。

「しかし、この大いなる危機にあって、神のしもべたちは自らを頼みとしてはならない。イザヤ、エゼキエル、ヨハネに与えられた幻において、天が地上で起こっている出来事とどれほど密接に結びついているか、また、神に忠実な者たちに対する神の配慮がいかに大きいかを、私たちは見る。世界は支配者不在ではない。これから起こる出来事の計画は主の御手の中にある。天の威厳の主は、諸国の運命も、御自分の教会の事柄も、みずからの配慮のもとに置いておられる。」『証言』第5巻、752、753頁。